

JICA 海外協力隊

海外で、千葉で、持続可能な世界を目指す

SDGs



渡辺 章 (松戸市)
 ○2005年度2次隊:パプアニューギニア/感染症対策
 ○2009年度2次隊:ミクロネシア/感染症対策

↓
 法務省保護司、まつ国際文化大使

佐藤 秀樹 (松戸市)
 ○2001年度3次隊:エクアドル/野菜栽培

↓
 環境NGO、大学専任講師

田中 永和 (君津市)
 ○2017年度1次隊:マラウイ/小学校教育

↓
 小学校教諭

森下 徳顕 (柏市)
 ○2016年度3次隊:ボリビア/サッカー

↓
 少年サッカーチームのコーチ

会津 素子 (成田市)
 ○2007年度2次隊:エジプト/青少年活動

↓
 成田市議会議員



鈴木 省子 (山武)
 ○2017年度1次隊:セネガル/コミュニティ開発

↓
 山武市職員

三次 恵美子 (御宿)
 ○2003年度1次隊:マーシャル/理数科教師

↓
 地域おこし協力隊

五十嵐 大介 (南房総市)
 ○2009年度3次隊:キルギス/家畜飼育
 五十嵐 早矢加
 ○2010年度3次隊:キルギス/村落開発普及員*

↓
 就農 ベレケの村
*現在は名称変更により「コミュニティ開発」

●問い合わせ先

JICA海外協力隊HP <https://www.jica.go.jp/volunteer/>

JICA海外協力隊

検索

●JICA千葉デスク

JICA海外協力隊HP 〒261-7114 千葉県千葉市美浜区中瀬2-6 WBGマリブイースト14階(公財) ちば国際コンベンションビュロー内
 TEL: 043-297-0245 Mail: jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp

What's JICA海外協力隊?

JICA海外協力隊は、開発途上国で現地の人々と共に生活し、同じ目線で開発途上国の国づくりに貢献する活動を行なっています。

JICA(独立行政法人国際協力機構)は開発途上国からの要請(ニーズ)に基づき、それに見合った技術・知識・経験を持ち、「開発途上国の人々のためにそれらを活かしたい」という想いを持つ方をJICA海外協力隊として派遣しています。

任期は原則2年間。これまでに98カ国に5万人を超える隊員を派遣してきました。帰国後は、日本や世界で協力隊経験を活かして活躍しています。

JICA海外協力隊3つの主な目的

- 開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与**
日本が持つ技術や経験を伝え、途上国の人々に役立ててもらいます。
- 異文化社会における相互理解の深化と共生**
深化する相互理解と共生の営みにより持続可能な開発の実現を目指していきます。
- 協力隊経験の社会還元**
本事業への参加を通じて身に付けた知識や経験を日本や世界の発展に役立てることが期待されています。

JICA海外協力隊経験者の強み

JICA海外協力隊経験者は、採用企業・団体の皆様から次のような点が優れていると評価されています。

- ▶ **グローバルな視野**
先進国と途上国の両方を経験することで世界を多角的に捉え、派遣された国だけでなく、日本も世界全体の中での一國として捉えることができるグローバルな視野を持っている。
- ▶ **創意工夫・企画力**
前例のないこと、これまでできなかったことを自ら企画し、状況に合わせて実践する能力を備えている。
- ▶ **語学力**
英語、スペイン語、フランス語、ポルトガル語、中国語、アラビア語、ベンガル語、インドネシア語、タガログ語など、任国で現地の言葉を使って2年間生活・活動していた経験から高い言語能力を持っている。
- ▶ **粘り強さ・コミュニケーション力・交渉力**
周囲の理解を勝ち取るために焦らず、慌てず、諦めない姿勢を持ち、取り組む。
- ▶ **トラブルに動じない強さと柔軟性**
想定していなかった事態に遭遇しても、冷静沈着に対応することができる。

JICA海外協力隊とSDGs

SDGsの達成に挑み続けるJICA海外協力隊

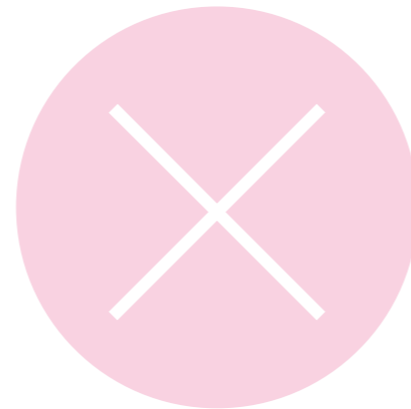
開発途上国で、現地の様々な課題解決に取り組むJICA海外協力隊。活動分野は9分野、190職種以上と多岐にわたり、どの業種も持続可能な開発目標(SDGs)の達成に欠かせないものです。そして協力隊での経験は、帰国後もそれぞれの仕事を通して社会に還元されています。

2030年までに、世界を変革していくための17の目標

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

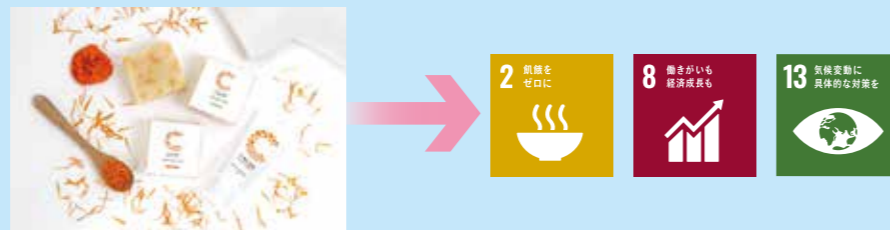


JICA海外協力隊の活動	活動分野と職種
計画・行政 国・地域づくりに関わるシゴト ●コミュニティ開発 ●コンピュータ技術 ●防災・災害対策 など	保険・医療 いのちに寄り添うシゴト ●看護師 ●感染症・エイズ対策 ●理学療法士 など
人的資源 教育やスポーツなど人を育てるシゴト ●小学校教育 ●各スポーツ職種 ●体育 など	農林水産 食べ物や自然に関わるシゴト ●野菜栽培 ●家畜飼育 ●土壌肥料 など
商業・観光 マーケティングや観光に関わるシゴト ●観光 ●経営管理 など	社会福祉 福祉に関わるシゴト ●ソーシャルワーカー ●障害児・者支援 ●高齢者介護 など
	鉱工業 ものづくりに関わるシゴト ●自動車整備 ●建設機械 ●食品加工 など
	エネルギー エネルギーに関わるシゴト ●電力 ●再生可能・省エネルギー など
	公共・公益事業 生活サービスに関わるシゴト ●土木 ●廃棄物処理 ●建築 など



私たちの行動は、SDGsと繋がっている

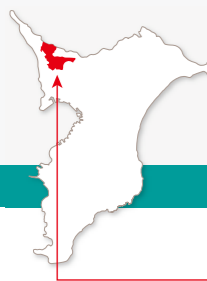
私たちの身近な行動は、世界の課題と様々な形で繋がっています。例えば、フェアトレードの商品を選んで買い物することは、開発途上国の人々の働き方を変えるだけでなく、貧困をなくすことや、児童労働を防ぎ、子どもたちに教育を受けさせることにも繋がります。



SDGsとは、「Sustainable Development Goals」(持続可能な開発目標)の略です。

2015年9月 国連本部で、日本を含む193の加盟国が、「みんながずっと地球に住み続けられるようにするためには」「みんなにとって幸せな未来をつくるためには」どうしたらいいかを話し合い、採択された世界共通の目標です。SDGsは開発途上国のみならず、先進国が抱える課題も網羅し、国やNGOなどだけではなく、民間企業や市民ひとりひとりの取り組みが求められています。

What's SDGs?



ボリビア多民族国

人口 1,135万人(出所2018年 世界銀行)
面積 1,100,000km²(日本の約3倍)
公用語 スペイン語及びケチュア語、
アイマラ語を中心に先住民言語36言語



Plurinational State
of Bolivia

JICA海外協力隊経験者エピソード -SDGs達成を目指して-

(柏市) 森下 徳 顕

《2016年度3次隊/ボリビア/サッカー》

子供達にはサッカーの技術だけでなく モノを大事にすることも...



日本での教え子たちと



雨が降るとグラウンドが大きな水たまりに



● 経歴

愛知県豊明高校、愛知FC→国際武道大学体育学部体育学科→ジャクパスポートクラブ千葉支部→(有)マイティ・スポーツクラブ→現職参加でJICA海外協力隊→現職復帰

● 協力隊参加前

高校生の時に協力隊経験者でもある高校のOBが地元で連れてきたアフリカの少年野球チームの試合を見たことや大学で協力隊経験者から話を聞いたことで、国際協力に関心を持ちました。大学卒業と同時に協力隊に応募しましたが不合格。その後、幼児体育指導や少年サッカーチームの指導に携わりました。結婚し子供が生まれましたが、39歳になった時、再び協力隊への夢が蘇りました。長年抱いてきた国際協力への情熱とJICAの現職参加制度の内容を家族や職場に伝え、再度協力隊に応募するとなんと合格。高校生からの念願を叶えることができました。

● 協力隊の活動

協力隊として派遣されたのは南米ボリビア。そこで4歳から18歳の少女へのサッカーの指導や練習メニューの改善、大会やイベントの開催補助を行いました。他にも、物や資金が足りない中で身の回りにもあるものからトレーニング道具やユニフォーム



ボリビアの子供たちと過ごすオフの日の一コマ

● 帰国後

帰国してすぐに職場に戻ることで、職場への感謝の気持ちを改めて感じました。しかし、チャリティイベントや清掃活動などをやろうと考えてもなかなか簡単にはいかず、協力隊で色々な活動をしてきたからこそ、日本でやりたいことができない現実にもどかしさを感じることもありました。そのような時は、「辞めることは簡単だけれど、ここで変化を起こさなければ世界を変えることなんてできない」という気持ちで新たな取り組みを考えたり、地道に働きかけを続けています。ボリビアでボロボロの靴で練習を頑張る子供たちと触れ合っていた為、日

● スポーツの力

スポーツはルールの下で皆平等です。人々の健康、教育、社会包摂的目標への貢献と同様、女性や若者、個人やコミュニティの能力強化について強い推進力を発揮します。また、スポーツの持つ、人々を集める力や人々を巻き込む力によって広いネットワーク、コミュニティづくりに貢献します。



現在の取り組みに関連するSDGs

柏市サッカー協会のスタッフもしているため、自分のチームの子供たち以外にも広くボリビアでの活動やそこから得た経験を伝えていきたいと思っています。サッカー指導だけでなく、市や学校のイベントなどで国際協力の仕事についてのキャリア教育授業や世界の問題を考える機会を提供したいと思っています。また、幼稚園での幼児体育も担当しているので、絵本の内容をSDGsに当てはめるなど、子供たちが早くからSDGsに触れるような教育を行っていききたいです。

*現職参加制度...企業や官庁などの所属先に身分を残したまま海外協力隊に参加する制度。



マーシャル諸島共和国

人口 58,413人(出所2018年 世界銀行)
面積 180km²(霞ヶ浦とほぼ同じ大きさ)
公用語 マーシャル語、英語



Republic of
the Marshall Islands

JICA海外協力隊経験者エピソード -SDGs達成を目指して-

三次 恵美子 (御宿)

《2003年度1次隊/マーシャル/理科教師》

『人と人、人と自然の距離が近い生活』が 常に恋しくて



● 経歴

学生時代に日本ケニア学生会議実行委員→JICA海外協力隊→大学院でラオスの養殖業について研究→外資系IT企業→御宿にて地域おこし協力隊、青年海外協力隊千葉OB会会長



世界の国の食を知るグローバルキッチン



マーシャルの女の子たちと

● 協力隊参加前

学生時代に日本とケニアの二国間交流をする学生団体をケニアの学生と立ち上げたことで海外で活動することに興味を持ちました。また、ケニアで知り合ったJICA海外協力隊(以下、協力隊)の活動を見て、将来協力隊に参加することを心に決めました。

● 協力隊の活動

大学卒業時に協力隊に応募し、理科教師として南太平洋のマーシャル諸島共和国に赴任しました。任地は小島にある全寮制のクリスチャン高校で、島にはその高校の生徒と関係者しか住んでいないというかなり特殊な環境でした。

活動としては高校の理科・数学の教員として授業を受け持つ他、同僚教員への技術移転も担当しました。理科の授業では身近にある道具を使った実験などを取り入れて少しでも授業を面白くするよう工夫しました。数学は小学校の教育が十分ではないために、高校生でも掛け算や分数も出来ない生徒が多くいて、基礎的な学力を定着させることに苦労しました。

● 帰国後

帰国してからは大学院に進学し、修士課程を卒業後にシステム開発の仕事をしたものの、協力隊の活動のような『人と人、人と自然の距離が近

● 地域での パートナーシップ

日本では普段「地域」を意識することはありませんが、途上国で任地の人々と密接な関係を持ち、任地の課題に取り組んだ協力隊は、「地域」の人々の暖かさや自然の豊かさなど地域の持つ魅力を感じ取ります。そんな協力隊経験者が日本各地で地域おこしに取り組んでいます。

御宿の海岸は白く広大な砂浜やフオトスポットとなるエリアがあり、アカウミガメの産卵地にもなっています。



その他にも、協力隊経験者の仲間たちと共に、任国の食文化を紹介することで参加者に異文化を体験して



現在の取り組みに関連するSDGs

● これから

ゲストハウスの方は賃貸契約の関係で運営をやめることになりましたが、低コストで移動可能な交流の場として、これまでやってきたタコス屋台をキッチンカーにして営業していくつもりです。このキッチンカーを賑わいの欲しい場所に出店することで、人の流れを創り出したいと考えています。また、これまでの活動も町内の他場所でも継続し、地域と人を結びつけるような役割を担っていきたくと思っています。観光だけではなく、地域の人と交流するような仕組みを創り出していくことで、よりディープに御宿を好きになってもらうのが目標です。

もろう「グローバルキッチン」を開催しています。

マラウイ共和国

人口 1,862万人(出所2019年 世界銀行)
面積 118,000km²(日本の約1/3)
公用語 チェワ語、英語(以上公用語)、
各民族語



Republic of Malawi

JICA海外協力隊経験者エピソード -SDGs達成を目指して-

田仲 永和 (君津市)

《2017年度1次隊/マラウイ/小学校教育》

視野を世界に広げて物事を考えられる 子どもたちを育てる



コロナ禍、オンラインで世界の国と繋げて国際交流授業を実施



マラウイでの数学の授業



● 経歴

千葉大学教育学部小学校教員養成課程
理科選修(在学中に1年間交換留学で
中国湖南省湖南大学へ)→在中国日本
国大使館(在外公館派遣員として)→外
務省国際協力局無償資金技術協力課→
千葉県公立小学校→現職参加でJICA海
外協力隊→君津市立小学校に復職

● 協力隊参加前
小さい頃から海外で人を助ける仕
事につきたいと漠然と考えていまし
た。海外との繋がりをを持った教員にな
りたいと思い、中国に留学し勤務経
験を積みました。その後教員になるも
なかなか海外経験が活かせず歯がゆ
さが募り、JICA教師海外研修*に参加
しました。そこで協力隊の活動を生で
見て自分も協力隊をやってみたく思
い、応募を決意しました。

● 協力隊の活動
メインの活動は教員養成大学の先
生として小学校教員志望の大学生へ
算数科教授法と体育科教授法の指
導でしたが、その他に自主的に近隣
小学校に訪問し、授業改善のアドバイ
スも行いました。そんな中で、教育に
関する音楽をつくるきっかけを得て、
縄跳びソング、環境保護ソング、そし
てかけ算ソングをつくりました。活動

● 帰国後
派遣前は、自分が思い込んでいた公
立小学校という枠の中で何をするかを
考えていました。しかし今は、公立小
学校の枠をどこまで広げられるかを
考えています。学校現場では学校の教
育課程(カリキュラム)通りに進めるこ
とを重視してしまいがちですが、もっ
と大胆にチャレンジしてよいのではない
かと思っています。特に総合的な学習の
時間では、一歩踏み出せる可能性のあ
るカリキュラムを目指しています。

* JICA教師海外研修…開発教育・国際理解教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を学校現場や授業で活かしてもらう研修プログラム。



パプアニューギニア独立国
Independent State of Papua New Guinea
人口 約861万人(出所2018年 世界銀行)
面積 約460,000km²(日本の約1.25倍)
公用語 英語(公用語)の他、ビジン英語、モツ語等

ミクロネシア連邦
Federated States of Micronesia
人口 約112,640人(出所2018年 世界銀行)
面積 約700km²(奄美大島とほぼ同じ)
公用語 英語の他、現地の8言語



JICA海外協力隊経験者エピソード -SDGs達成を目指して-

渡辺 章 (松戸市)

《2005年度2次隊/パプアニューギニア/感染症対策》

《2009年度2次隊/ミクロネシア/感染症対策》

自分の経験と途上国の人たちの意見を合わせて 感染症対策を...



● 経歴

外国語学部ロシア語学科→生保会社(外
国教育部門)→コンサルタント会社(海外
事業部)→JICA企画調査員(ジンバブ
エ)、経済学修士取得(国際開発専攻)→
医療コンサルタント会社(開発部門)、学
術博士・公衆衛生学取得、JICA海外協力
隊(パプアニューギニア、ミクロネシア)、
JICA専門家(エチオピア)→結核予防会
(海外事業部)→JICA(資金協力業務部)
→まつど国際文化大使、法務省千葉保護
観察所松戸地区保護司

● 協力隊の活動
パプアニューギニアでは同国保健省
のマラリア/フェリアリア対策課で、グ
ローバルファンドから提供された20万
円の蚊帳を配布して住民への使い方
等の啓蒙活動を行いました。ミクロネ
シア連邦では保健省のワクチン接種課
でワクチンのアドバイザーを務め、ワク
チンの調達や現地人同僚へのワクチン

● 帰国後
現在、地域ではまつど国際文化大
使として小中学校への出前講座やイ
ベントで開発途上国の文化紹介を
行っています。また、法務省の保護司
を務めており、矯正施設から保護観
察付きの仮釈放等となった人々の保
護観察活動として、定期的な面談、再
び犯罪の方面に戻らないように対象
者に指導・助言を行っています。

● これから
持続可能な世界を創るためには、
自分自身の行動が世界の問題に関
わっている、という自覚が必要だと
思っています。学校で教員としてでき
ることは、SDGsをテーマに学校全体
で教育課程の改善に取り組むこと。
児童の変容を通して、地域の方々の
考え方にも影響を与えていきたいで
す。そのため、今よりもっと世界を身
近に感じて、視野を世界に広げて物
事を考えられる子どもたちを育てる
教育を目指しています。

*1 シニア海外ボランティア…2018年度秋募集以降に制度及び呼称を改正。2018年度秋募集以前は、「青年海外協力隊」(20歳~39歳)、「シニア海外ボランティア」(40歳~69歳)と年齢で呼称を分けていたが、現在は幅広い職種で応募可能な「一般案件」で派遣される人を「青年海外協力隊」、一定以上の経験や技能などが必要な「シニア案件」で派遣される人を「シニア海外協力隊」と呼ぶ。
*2 グローバルファンド…(The Global Fund to Fight AIDS, Tuberculosis and Malaria 旧略称:世界基金)低・中所得国において三大感染症(エイズ、結核、マラリア)対策のために資金を提供する機関



うらす市市民大学での講義の様子



ウガンダにて現地の医療者と

● 協力隊参加前
小さなころから旅が好きで世界を
見たいと思っていたため、8mmビデオ
で海外協力隊の宣伝を見たり、英語
以外の言語を話せるようになるべく
言語学を学びました。
その後医療コンサルタントとしてエ
チオピアに出張に行った際に海外協
力隊員と出会い、彼らが厳しい環境の
中でも現地人の仕事や生活の改善に
情熱をかけている姿を見て、自分も協
力隊に参加したいと思いました。しか
し当時自身の持っているスキルでは応
募可能な職種がなかったため、まずは
国際開発プログラムや国際経済学を
学び、企画調査員に応募してジンバブ
エに赴任しました。現場に入ったこと
で公衆衛生上の問題が深刻であるこ
とがわかり、蚊帳を使ったマラリア対
策の研究で博士号を取りました。その
後、感染症予防の分野でシニア海外ボ
ランティア*としてパプアニューギニア、ミ
クロネシア連邦に派遣されました。

● 帰国後
の保管・管理や使い方等のアドバイ
ザー業務を行いました。その後、地域
保健のIICA専門家として、エチオピア
の保健省で母子保健栄養改善プロ
ジェクトに携わりました。



ザンビアでの結核予防会の活動

のシニアボランティア派遣を控えてい
ます(2020年度2次隊ですが、新
型コロナウイルスの影響で派遣見合
せになっています)。SDGsの中の公衆
衛生分野のターゲットの実現のため
に、自分の経験と途上国の人たちの
意見を合わせて感染症対策を行う予
定です。具体的には、マラリア対策手
帳のスマートフォン用アプリケーション
を作成しアプリで導入し、マラリア
対策に役立てたいと思っています。



現在の取り組みに関連するSDGs

● 学校での国際理解教育

日本国内、地域、教室の中の国際化や
多様性が進む今の時代、自分と違う価
値観と出会う場面が増えていきます。感
受性が豊かな学生時代に日本国内だ
けでなく世界と自分たちとを比べるこ
とで、自然と世界の多様性も認められ
る感性を身につけることができます。
将来を担う子供たちがより多くの人
にとって住みよい社会を作っていくた
めに、学校での国際理解教育は重要
な役割を担っています。



現在の取り組みに関連するSDGs

* JICA教師海外研修…開発教育・国際理解教育に関心を持つ教員を対象に、実際に開発途上国を訪問することで、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を学校現場や授業で活かしてもらう研修プログラム。

エクアドル共和国

人口 1,708万人(出所2018年 世界銀行)
面積 256,000km²(本州と九州を合わせた広さ)
公用語 スペイン語
(他にケチュア語、シュアール語等)



Republic of Ecuador

JICA海外協力隊経験者エピソード -SDGs達成を目指して-

(松戸市) 佐藤 秀樹

《2001年度3次隊/エクアドル/野菜栽培》

社会的弱者を支える
包摂的な地域づくりを



● 経歴

外語大学(ロシア語)→農学部(大学)→
JICA海外協力隊→大学院修士(農業)
→農業・農村開発コンサル→環境NGO
(※勤務しながら大学院博士課程に通い、
博士<農業>の学位を取得)、江戸川大学専任講師



松戸消費生活展にてSDGsの普及啓発活動



バングラデシュにおける農作物の固有種子の保存



エクアドルの小学校における堆肥づくり

● 協力隊の活動
エクアドルでは指導者も生徒も農作業で汚れることに対する抵抗があり、農業実習がうまく進まないことが多くありました。しかし、地域資源を有効に活用した環境保全型農業を普及啓発していくためにも、自分で率先して堆肥の材料となる家畜の排泄物を運ぶ等しました。最初の1年は言葉の壁や価値観の違いで悩むことが多く、精神的に病み、脂っこい食べ物にも適応できず、暑い気候で食欲は低下し、どんどん痩せて体調を崩すことが多かったです。途中、あまりの辛さに任期短縮して帰国しようと思いましたが、現地の人たちが他の協力隊員が励ましてくれました。その後、任地を変更し、気候も生活もだいふ楽になったことで身体的にも精神的にも回復しました。活動

● 帰国後
帰国後は大学院修士課程に進学し、農村開発について学びました。大学院修了後は、コンサルタント会社等で働きました。そして、イラン、ミャンマー、スーダンやエクアドル等での農業・農村振興の事業計画づくり、関係者との調整、会計処理などを担当し、協力隊時の異文化に対する経験を活かしながら進めることができました。その後は、環境NGOで、ベトナムでの廃棄物管理、インドネシアではエコトリスムの事業等に従事してきました。また、バングラデシュでは、現在、都市の生物多様性保全、農畜林水産物の6次産業化、地域の農作物の固有種を保全する農業農村プロジェクトを行っています。NGOでの活動は続けながら、現在は、本業として大学にて環境学を教えています。また、自分の暮らす松戸市の一般住民を対象としたSDGsの普及啓発活動に関わり、大学でも松戸市でも、海外の

SDGsで世界を変える

2030年を目標年次とするSDGsは、環境に加え社会・経済の各分野を統合した、まさに世界全体を変えていく目標となっています。しかし、その変化をもたらす鍵は地域社会、とりわけ一人ひとりの行動=変容とされています。協力隊を通じた多様な経験はその気づきを与えてくれる貴重な機会となっています。



現在の取り組みに関連するSDGs

● これから
グローバル(バングラデシュ)に、そしてローカル(松戸市)に考え行動していきたいです。特に、開発途上地域ではパートナーシップの構築が弱く、住民と行政の繋がりが希薄なので、SDGsにもある「誰ひとり取り残さない」を目標に、行政、企業、学校、大学、NGO等が連携・協働して社会的弱者(子ども、女性、高齢者、障がい者等)を支える包摂的な地域づくりを展開していきたいです。

*技術補完研修等…相手国からの要請に的確に応えることができるよう、要請内容、合格者の技術レベルおよび経験を助産のうえ、技術等の向上のため、派遣前に行われる研修プログラム。

Republic of Senegal

セネガル共和国

人口 1,630万人(出所2019年 世界銀行)
面積 197,161km²(日本の約半分)
公用語 フランス語(公用語)、ウォロフ語など各民族語



JICA海外協力隊経験者エピソード -SDGs達成を目指して-

鈴木省子 (山武市)

《2017年度1次隊/セネガル/コミュニティ開発》

今度は自分が日本で困っている人たちを支えていきたい



● 経歴

経済学部→山武市役所(収税課、市民課)→現職参加でJICA海外協力隊→山武市役所に復職(現在は成東文化会館)



現在の業務の様子



村での農業研修会の様子。畑の耕し方を伝えている時。



ダカール(首都)での国際展示会の販売の様子

● 協力隊参加前

大学の開発経済学の授業で水の防衛隊*を知ったことで、途上国や海外協力隊に興味を持ちました。大学卒業後は地元山武市役所に就職し、そこで協力隊経験者と知り合いました。その方は他県の市役所を退職後協力隊に参加しましたが、現職参加制度を紹介してくれ、私も是非チャレンジしたいと思いました。山武市ではそのとき現職参加制度はありませんでしたが、制度導入の条例が決定したところで協力隊の試験に受けました。未知で危険というイメージから参加を反対する方もいましたが、新しいことへの挑戦を応援してくれる方が周りに多くいたことで、励まされました。

● 協力隊の活動

セネガルでは現地の女性グループの収入向上に取り組みましたが、お金や物資を与えるわけではなく言葉もできない私が、『外国から来た支援者はお金をくれる』と思われている現地の方々との信頼関係を築くのは大変でした。また、文化や価値観の違いですれ違ふことも多く、その度に「彼女たちのために頑張っているのに」と裏切られた気持ちになりました。しかし後から彼女らの言動の文化的な背景を知ったり、私の提案が彼女たちにとって合理的ではなかったのだと気付き、少し

● 帰国後

帰国して市役所に復帰した時、周囲との温度差を感じ、自分の存在意義について考えることもありましたが、セネガルでの活動で周りに色々言われることには慣れていましたし、落ち込んで周りのせいにするより

自分大きく成長できました。現地では多くの方に支えて頂き、自身大きく成長できました。村で野菜栽培をしている女性グループでは畑の管理等に問題があった為、私も一緒に栽培を行ったり、地域開発支援センターの現地人研修員に野菜栽培の研修をしてもらいました。それによりグループの女性たちは正しい畑の管理や野菜の育て方を知ることができ、より多くの野菜を栽培できるようになりました。嬉しいことに私が帰国した後も、収穫量や収益が上がったという連絡が来ます。

多文化共生、在日外国人支援

現在日本に住む外国人は増え続けており、日本語が不自由な外国人は多く抱えている生活しています。人口減少や少子高齢化、地方の過疎化が進む現代の日本で、技能実習生を含む在日外国人の力は必要不可欠であり、かれらをサポートする仕組みやサービスが求められています。

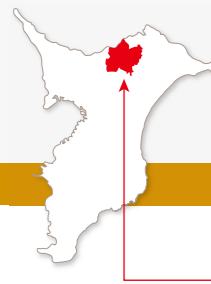


現在の取り組みに関連するSDGs

● これから

セネガルの任地で現地語を覚えてもらいながら現地語で生活していたので、日本語で苦労している在日外国人に少しでも関わりたいと、日本語教師の資格取得のため勉強をしています。セネガルにいたときに自分を支えてくれた人たちのように、今度は自分が日本で困っている人たちを支えていきたいと思っています。

*水の防衛隊…アフリカの水や衛生の問題の改善を草の根レベルからサポートするため水・衛生分野の職種で派遣されるJICA海外協力隊やJICA海外協力隊。



エジプト・アラブ共和国

人口 ● 9,842万人(出所2018年 世界銀行)
面積 ● 1,000,000km²(日本の約2.7倍)
公用語 ● アラビア語、英語



Arab Republic of Egypt

◎ JICA海外協力隊経験者エピソード —SDGs達成を目指して—

(成田市) 会津素子

《2007年度2次隊/エジプト/青少年活動》

物の豊かさよりも心の豊かさを政治の世界でも追及していきたい



エジプトの子供たちと一緒に



● 経歴

役者として舞台やTVに出演→短期大学保育科入学→児童養護施設→JICA海外協力隊→障がい者外出支援→地方統一選挙にて成田市議会議員に当選
現在、成田市議会経済環境常任委員会副委員長、緑の党グリーンズジャパン千葉県本部共同代表

● 協力隊の活動

協力隊ではエジプトのストリートチルドレンのための児童養護施設で余暇時間の提供や情操教育を行いました。役者だった日本昔話「舌切り雀」をお芝居にして様々な場所で発表の機会をつくり人前で演じることで、子供たちは自信を手に入れ大きく成長したと思います。日本では空気を読むこ

● 帰国後

現在成田市議会議員として、環境配慮型農業の推進、市民の政治参加、そして学校給食の質の向上を目指す取り組み等に力を入れています。市議会議員の活動は、自分の足で歩いて課題を発見し、地域の人や声の小さな弱者に寄り添って取り組みを考えると、う点でまさに協力隊の活動と似ています。エジプトでストリートチルドレンという社会の底辺に存在に関わり、物やお金の温かさを感じたからこそ、物の豊かさよりも心の豊かさを政治の世界でも追及していく

● 女性の政治進出

ジェンダーギャップ指数という男女格差を測る指標がありますが、2020年、日本は世界でも下位の121位という順位でした。特に政治分野への女性の参加は遅れており、大きな課題とされていますが、地域の課題に取り組んだ協力隊の経験は、日本の社会を変えていく原動力となっています。



現在の取り組みに関連するSDGs

成田市の女性議員の割合は1割。政治の場や企業で女性議員や女性幹部を増やす必要があると感じています。また成田市は有機農業が盛んな町で、2019年の台風でも農家の方々は農家同士の支え合いで停電を乗り越えました。農業は地域づくりの鍵ですが衰退傾向にあるので、農業の推進にはこれからも力を入れていきたいです。成田空港があることで外国人の住民が増えているにもかかわらず多文化共生についての取り組みは不足しているため、今後、様々な人たちにとって住みやすい町にするためにも多文化共生に力を入れていきたいです。

● これから

つもりです。協力隊経験者こそ、政治の世界に挑戦してほしいです。



キルギス共和国

人口 ● 620万人(2019年:国連人口基金)
面積 ● 198,500km²(日本の約半分)
公用語 ● ロシア語(キルギス語は国語)



Kyrgyz Republic

◎ JICA海外協力隊経験者エピソード —SDGs達成を目指して—

五十嵐 大介 (南房総市)

《2009年度3次隊/キルギス/家畜飼育》

五十嵐 早矢加

《2010年度3次隊/キルギス/村落開発普及員*1》

地域での雇用創出を図り 農業の促進に関わりたい



● 経歴

大介さん
酪農学園大学→食品会社→JICA海外協力隊→乳業会社→北海道移住→南房総市で就農
早矢加さん
関西学院大学商学部→商用自動車メーカー→現職参加でJICA海外協力隊→商用自動車メーカー復職→北海道浦河町にて地域おこし協力隊→南房総市で就農



大介さんのキルギスでの活動の様子



早矢加さんのキルギスでの活動の様子

● 協力隊参加前

早矢加さん：小さな頃に見たテレビの影響で国際協力に関心を持ち、大学生時代にアメリカでボランティア活動を行っていました。卒業後は自動車メーカーの海外販売部で業務をしつつ、国際協力に関わるため現職参加制度を使って協力隊に参加しました。
大介さん：大学時代に協力隊経験者の人の話を聞く機会があり、協力隊に興味を持ちました。卒業後は食品会社に就職し豚の繁殖と生産に携わっていましたが、日本では生産の現場と消費者の間に大きな隔たりがあることに違和感があり、自分たちで家畜を育てて食べる生活に身を置き、自分の知識や経験を活かして人々の役に立つため協力隊に参加しました。

● 協力隊の活動

早矢加さん：キルギスでは一村一品プロジェクトに参加するグループの立ち上げ、商品設計、製作、品質向上、販売に携わりました。幅広い商品、地域を担当していたため移動や調整が大変でしたが、それによって行動力やコミュニケーション能力が上がったと感じています。
大介さん：キルギスの村ではほぼ全ての家で家畜を飼っており、ごちんまりした規模(家族や集落)で家畜の糞を使って様々な作物を育てるという複合的な農業を行っています。そんな現地



ベレケの村のカレンデュラ商品

移住後は研修を受け、研修先の師匠の手助けもあり農業を始めることができました。「ベレケの村」(ベレケはキルギス語で「移住」)

人の知恵や技術の豊富さに圧倒され、堆肥の作り方を教え野菜栽培に携わったり学校で日本語を教えつつ、村の全ての家を訪ねキルギスの複合的農業を学びました。
帰国後
帰国後はそれぞれ企業に就職、復職しましたが、結婚し「キルギスで見たいような、自然に負担がかからない方法・規模で牛を飼ってチーズを作り野菜を育てる」という共通の夢を叶えるため北海道に移住しました。しかし北海道では就農のハードルが高く、理想と現実とのギャップに阻まれました。そんな時、キルギスの野山一面に咲いていたカレンデュラ(和名：キンセンカ)を思い出したのです。カレンデュラはキルギスでは石鹸や化粧品、食品に使われますが、日本では仏花など観賞用がメインだったので、日本でカレンデュラの可能性を広げられるのではないかと、カレンデュラ栽培研修を実施している南房総市に移住を決めました。
研修後は研修を受け、研修先の師匠の手助けもあり農業を始めることができました。「ベレケの村」(ベレケはキルギス語で「移住」)

● 地域における農業の可能性

農業が関連するSDGsのゴールは幅広く、飢餓撲滅や食料自給率の向上、雇用創出につながります。また地域で農業を維持していくことで、農家同士の支え合いや地域のコミュニケーションも活性化され、住み続けられる地域の基盤を作ります。農業は、地域の暮らしを豊かにし、持続可能な社会づくりを実現していく基盤となっています。



現在の取り組みに関連するSDGs

これから
いつかベレケの村でキルギス人労働者を受け入れ、日本の農業技術の良いところを自国に持って帰ってもらいキルギスの発展に貢献するような取り組みをしたいと思っています。また地元のお母さんや障がいのある方々を巻き込み地域での雇用創出を図ったり、新たに農業を始めた方や家族農業に関心のある方の相談窓口になり、農業の促進に関わりたいです。

*1 村落開発普及員…現在は名称変更により「コミュニティ開発」。
*2 一村一品プロジェクト…大分県発祥の一村一品(OVOP)運動からヒントを得たコミュニティビジネス